# 「山古志復興新ビジョン研究会」

# 第２回地域基盤再生分科会　議事概要

1.日　時　**平成１７年2月１１日（金）１５：００～１７：３０**

2.場　所　**長岡ホテルニューオータニ　３F「ふじ」**

3.議事概要

**（１）分科会座長挨拶（省略）**

**・社団法人　北陸建設弘済会理事長　和田　惇**

**（２）出席者紹介と配布資料の確認（省略）**

**（３）第１回分科会の報告**

**①第１回分科会の主な意見と対応（事務局より資料－３説明）**

**②他の分科会の主な意見（事務局より別紙説明）**

**（４）復興新ビジョン中間報告（素案）の検討**

**①住民アンケート調査結果（速報）（事務局より資料－４説明）（省略）**

**②山古志復興新ビジョン（中間報告骨子案）（事務局より資料－５説明）**

**防災学習に関連して（事務局より別紙地図説明）**

**質疑応答**

**（丸井委員）**

**山古志村を中山間地域の復興のモデルとして、阪神大震災のような都市型の震災と今回のような中山間地の被災とは復興のあり方が違うということが明瞭に記述していることは大切であり適切である。**

**（松本委員）**

**「大地」が崩壊したということをもっと書いたほうが良い。自然は放っておけば良いというものではない。**

**（丸井委員）**

**日本有数の地すべり地帯であり、「大地」が非常に傷みつけられたことを明瞭に記載したほうが良い。日本は地すべり地帯が多く、他の中山間地においても直下型地震がおきれば同じことになるわけで十分気をつける必要がある。**

（大川委員）

「国土保全」というキーワードが落ちている。山に人が居なくなり山が荒廃して様々な問題が起きていることは学問的に認識されている。国土保全の観点で中山間地は重要であることが記述されるべきであり、山古志の方々はそれを担う人達という位置づけである。

（丸山委員）

目先の議論ではなく、50 年 100 年先を考える事が必要ではないか。単に戻す事ばかりではなく、被災した現状を国土保全の目でどうして行くのかが重要だ。

（丸井委員）

状況が全部変わったことを認識し、これから先の安全性を視野に置いた議論が必要。地震によって不安定な土砂が大量に芋川に流入した。今後下流に及ぼうとしている危険を防ぎながら、帰村を考えなくてはいけない。棚田は本来昔の地すべり地帯にあり、度重なる地すべり後も棚田を再建して生活されてきたから国土が保全されていた。棚田の再生は、観光としてだけではなく国土保全として実施される意義が大きく、観光だけでは保全されないであろう。

（丸山委員）

平らな場所が少ないのであれば、トンネルのズリや切土の残土を利用して踏み固めるなど公共事業を利用して平場を作ることが考えられる。

（丸井委員）

被災状況に応じて分散帰村ということを住民に理解されることが大きなポイントである。帰る際、より安全な場所に移ったほうが良いと判断するかもしれない。このことは理解されるであろう。

（松本委員）

私の感覚では、種芋原、虫亀は被害が少なく復旧復興の拠点となり、芋川流域に戻って行くベースキャンプになるのではないか。

（和田座長）

その場合に最初に必要なのは学校等の公共施設になる。

（松本委員）

子供が居る世帯はそうであるが、居ない世帯は小中学校が無くても、畑ができるだけでも良いだろう。

（和田座長）

そこは世代別に分けて考えるべきではないか。

（事務局）

どの辺りを公共として先行すべきか議論頂き、強くビジョンに提言していきたい。二次災害は愚の骨頂であり、安全安心を前提に、この委員会がロードマップを示し、提言しうるかが重要である。そこで、山古志だけでも判定委員会を設けてジャッジしていく方法もある。

（松本委員）

帰ってもいいエリアを示すならいいが、個人ではなくて集落単位の帰村を原則とする、という表現には抵抗を感じる。帰るかどうかは個人の問題ではないか。

（丸井委員）

個人の意思との調整は難しい問題で、いずれにせよ安全を確認して帰村することが大原則に

なる。具体的ステップとしては融雪時期に再度調査をして危険度判定のための確認が極めて重要だ。

（大川委員）

家はたいした被害は無くても、裏山が危ないということなどがあり、細かく見てゆく必要がある。その被害状況を住民が納得するかたちにする必要がある。

・山古志土砂災害ハザードマップ（事務局よりパワーポイント説明）
・質疑応答

（丸山委員）

今一番知りたいのは、可住地エリアが何処にあるかである。今後人工的に平場を造るとしたらどこが可能かなど、今の図では判らないので調べて頂きたい。

（丸井委員）

現在は作業時間が無かったので、概略の話にとどまっている。次の段階では、集落の状況、地震後の一斉点検のデータを入れたうえで、ご指摘の可住地エリアを検討する必要がある。個別斜面の危険性の解析は時間が必要で、すべての集落は時間的に無理があるので、甚大な被害があった部分など優先順位を付けて進めたらどうか。

（事務局）

今回の新ビジョンは、相当踏み込んだ議論をしている。相当のバックデータを検討して信頼性をもって安全に戻れる所を言及できればと考えている。同時に、そのために必要な公共施設は何か、これら 2 つをセットで中間報告には具体的に書きたい。

現在、県内では積雪による被災住宅への被害が深刻化している。山古志も同様の状況が進行している。来年も降雪を越えなくてはならないので、豪雪など雪に対する対策も必要と考えている

（大川委員）

本来なら潰れない積雪荷重でも、地震で家が歪んでいるために潰れやすくなっている。

（和田座長）

雪崩に対する監視網や点検が必要である。

（丸井委員）

エリアが広いので何処をプロットして監視をするかが難しい。点検は各機関が実施していると聞いている。実際大きな崩壊が起きているところは雪崩予防柵が何基も落ちてしまっている。降雪前の緊急措置しか時間的にできていない現況である。次の冬に際しては十分考える必要がある。

（事務局）

生活再生分科会で雪氷冷熱システムの導入について意見が出ているがどうだろうか。

（和田座長）

労せずして雪を集めることができれば、高価な燃料が沢山あるのと同じである。融雪水を冷却水として野菜などの抑制栽培に利用している例は県内にもある。

（大川委員）

以前、雪ダム構想が話題になったが結局採算が合わなくてダメになったケースがある。昔は雪室などがあった。

（事務局）

採算ベースでなくても教育への利用など、山古志はこれから整備するところもあり、雪を活用した設備について提案があれば教えていただきたい。

（丸井委員）

防災大学院について、私の個人的意見としては有効であり是非追及していただきたい。今回のインパクトの大きさを考えれば、この災害を後世に伝えて防災学習することは有効である。具体的には、河道閉塞が起きている東竹沢はその適地であると思う。さらに、大量に発生する土砂で平場を造り、道の駅を造りメモリアルエリアとすることも可能であると思う。

観光的な側面では、地震の情報は世界を巡っており、海外にも目を向けるべきである。防災の分野においても同じような条件の国に情報発信すべきで、学びに来ていただくことも含めて考えられる。

（事務局）

中越地震のアーカイブスをつくる発想もある。現在、各機関、学会等で地震に関する膨大なデータが蓄積されている。時系列に詳細な記録があり今後もモニタリングがされるだろう。こうした記録は当然重要である。しかし、これを誰が中心となって継続するかが課題である。この機会にアーカイブスをつくることを提言することはできる。

（松本委員）

山古志という場所で言えば、河道閉塞のダムは将来残るのであれば、ある種の自然の驚異を感じられるかたちが良いと思う。観光という見るものだけではなく、棚田で田植えを体験してもらうような事が増えるような仕掛けはないだろうか。

（和田座長）

地域学のような深いものが地域を興してゆく上で必要だと思う。地元の人が自立してどう考えるかに拠るだろう。

（大川委員）

自然塾のようなものが出てくればいいだろう。ターゲットを絞ってはどうか。例えば「一週間以上滞在者のみ」とか。八海山スキー場が出来た時、「初心者お断り」を売りにして入場者を伸ばした。このように特徴を明確にして集める仕掛けが必要ではないか。

（丸山委員）

棚田などの景観保全といった視点から、高圧線も含めた電線の地中化を提案してはどうか。

（松本委員）

具体的に考えすぎかもしれないが、地域基盤という事で道路網の話がもっと出ると思っている。現在長期的計画は有っても種芋原と長岡市を直結する道路が無いので、その件も触れていただきたいと思う。

これから雪融け時期にボランティアの応援がありえる。これまでは安全面の配慮で入れなかったボランティアを受け入れていくような内容があればと思う。

（和田座長）

インフラには情報網もあるわけで、富山県の山田村のように全村 IT 化など、奇抜かもしれないがこれからの近代的な村はそうなるのではないか。

## （５）.今後のスケジュールについて

・今後のスケジュールについて（事務局より説明）

## 閉会

（文責：事務局山口）